

ぎふグローバル ニュース「Co-Work」50 号 H28/10/20



10 月 15 日（土）岐阜大学地域減災研究センター内 防災・減災センターの地域減災コーディネーター 村岡治道先生に再度お越しいただいて地域の方と一緒に「第 2 回 地域防災を考える会」を開催しました。今回は実際にこの地域の指定避難場所である鶺小学校の配置図を使用して「HUG 避難所運

営ゲーム」をしました。今回も鶺地区の自治会長さん、東日本大震災の救援活動に参加された自衛隊の方や境川中学校の生徒さん、鶺小 PTA の方、笠松病院の方、県の防災課の方、大学の先生と大学生など様々な方に参加頂きました。

各グループに高校生 2～3 名と地域の方 2 名ずつ入ってもらい、計 5～6 人で 13 グループに分かれてまずは自己紹介から交流スタート。その後、8 月に村岡先生の HUG 講習会を受けた高校生たちがグループの主導となり、HUG ゲーム開始。HUG は

中学の生徒さんにはちょっと難しかったようですが、母校である鶺小学校のことはよくわかっているの、運動場や体育館の広さや配置について教えてもらえました。鶺小学校の校長先生も見学に来ていただけたので、鶺小学校のマンホールトイレの数や施設についての実情を聞くこともできました。



体育館にどのように避難者を配置するか、どの教室にどう
いう人たちに入ってもら
うのかを話し合っ
て決めたところ
で、他のグループはど
うな
っているのかをお互いに偵察。
グループに説明要員として一
人残してあとの人は他のグル
ープがどのように配置してい
るのか、どうやって決めたの
かを聞かせてもらいに行き、そ
れを自分のグループに持ち帰
って再考。他のグループの方
法を見ることで、また違っ
た方法や意見を知ることが
でき、多様性と意見を一つに
まとめることの難しさを知
ることが出来ました。



最後に参加頂いた方に一言ずつ
意見をいただきました。自衛隊
から来ていただいた細川さんは
実際に中越地震、東日本大震災
での救援に参加した時のことを踏まえて話していただきました。「災
害の怖さを忘れないでほしい。災害では生きるか死ぬかしかない。
それを分けるのは避難するかしないか。大規模災害時はすぐには消
防も警察も自衛隊も救援にはいけません。救援が来るまで自分たち
で生き抜かなければならない。そんな時に、事前準備も大切ですが、
周囲を思いやる心、声掛けがすごく重要です。高齢化が進んでいる
現在は、大人に頼るのではなく、若い方が率先して声掛けしたり手
伝ったりできるようになってほしい。」





鶉小 PTA 会長の古澤さんは「知っている知らないでは大きく違う。日ごろからこのように同じ鶉小校区である聖徳学園高校と一緒に考える時間が持てることはとても重要でこれからも続けていきたい」と話してくださいました。境川中学校からは生徒会長の水谷さんをはじめ6名が参加してくれ、「貴重な体験になった。今日学んだことを忘れないようにしたい」と話してくれました。またいつもスクールバスの運行でお世話になっているドライビングサービスの西野さんからは「普段事故処理を担当しているので意見をまとめる難しさを感じている。このように色々な人が集まって話すことで意見をまとめる訓練にもなる。災害時には若いと

か年配とか偉い人だとか関係なく、若い人も積極的に意見を言ってほしい。」

鶉小学校の校長先生も、「実際にうちが避難所になったら、体育とかグラウンドや体育館でできなくなることが、今回のシミュレーションで良く分かった。岐阜聖徳学園高校にもお世話になる可能性が出てくることありえる。連携を、これからお願いしたい。」と述べられ、今回の会が、実際にイメージする上で役にたった感じがしました。

参加者は、皆充実した表情でした。

今回のアンケート結果は 51 号で！